

## 令和6年度企画展「怪異と妖怪の世界」 浮世絵解説

二代歌川国貞 元治元(1864)年 来宵蜘蛛線(くべきよいくものいとすじ)

鶴(ぬえ)、土蜘蛛、酒吞童子などの妖怪退治で知られる源頼光の館で、家臣の渡辺綱と坂田金時が眠気を覚ますために百物語をしていると、次々と妖怪が現れます。



病気で寝ていた頼光は、怪しい気配に目を覚まし、枕元にあった愛刀「鬼切丸」に手をかけますが、そこにいたのは顔なじみの薄雲だったので一安心。

しかし薄雲は、頼光の恋人だった「千鳥の前」の亡霊で、頼光を憑(と)り殺そうとします。そこへ「鬼切丸」が自ら飛んで亡霊を追い払うと、今度は土蜘蛛の精が現れますが、頼光の四人の家臣によって退散させられてしまいます。

三代歌川国貞 嘉永5(1852)年 見立三十六花撰之内 藤原敏行朝臣 累の亡霊



藤原敏行が詠んだ百人一首にも入っている和歌、「秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる」が、左上の枠内に書かれています。この歌を踏まえて「累(かさね)の亡霊」が描かれているわけです。確かに「秋が来る」のも「亡霊」も、目にははっきりとは見えません。

「累」は、四代目鶴屋南北が書いた『色彩間苺豆(いろもようちよっとかりまめ)』の主人公です。夫に、鬼怒川べりの淵(累ヶ淵)に沈められて亡くなったため、口惜しさと苦しさに顔をゆがめており、不気味さが強調されています。

この物語は、理不尽に殺された者たちが輪廻転生を重ね(累)、祟りによって何人もの命を奪うという、かなり凄惨なものです。しかしそれだけに因果応報の恐ろしさが強調されています。

楊州周延 明治17(1884)年 雪月花 山城

六波羅雪 大政入道浄海

京都の六波羅の屋敷で雪景色の庭を見るのは、平清盛。「大(太)政入道浄海」は出家後の「法号」です。雪の降り積もった庭石や木々が無数の髑髏や骸骨と化しています。

出家してなお、このような怪異を目の当たりにする清盛の罪深さを表しているのでしょうか。



楊州周延 明治18(1885)年 雪月花 江戸 本所業平(なりひら)橋の雪

有馬家奥方 蜷(しじみ)売与吉 小野川喜三郎

江戸にあった久留米藩の上屋敷を舞台として起こった、化け猫騒動を題材としています。奥女中であった「おたき」は、藩主の有馬頼貴に気に入られ側室にとりあげられます。しかし、これを妬んだかつての同輩たちからひどいじめを受け、「おたき」は自ら命を絶ちます。

彼女がかわいがっていた猫は、復讐のため、いじめの先頭に立っていた老女中「岩波」を食い殺して姿を隠してしまいます。

続けて二人も死人を出した有馬家は大騒動になりますが、悪い噂が立っては家名に傷がつきます。そこで有馬家奥方は、「おたき」の弟で



ある与吉を呼んで姉が自殺したことの口止め料 80 両を手渡し、母親に届けるようにと言います。浮世絵はこの場面を描いています。

「岩波」を食い殺した猫は化け猫と化し、次々と有馬家の家中の者たちを襲いますが、最後は隠れ家になっていた火の見やぐらで、有馬家のお抱え力士だった小野川喜三郎に退治されたのでした(浮世絵の上段枠内)。

展示協力：秦野市立図書館はだの浮世絵ギャラリー(文化振興課)

発行 令和6年7月18日

編集 〒259-1304 神奈川県秦野市堀山下 380-3

はだの歴史博物館 Tel. 0463-87-5542 FAX 0463-87-5794